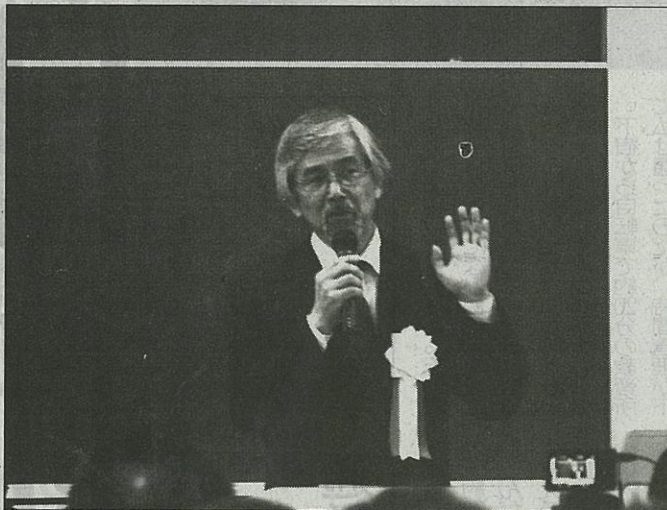


映画に描かれる「内鮮一体」

戦時期朝鮮の社会を読む—植民地研究と映画

講義室は立ち見が出るほど超満員で、講義室に入れない人もいた



3月17日、水野直樹・人文科学研究科教授の退職記念講演「戦時期朝鮮の社会を読む—植民地研究と映画」が、人文科学研究所本館で開催された。水野氏は「望楼の決死隊」は植民地朝鮮の国境にある村を舞台

に、朝鮮総督府の警察官駐在所を「匪賊」の襲撃から守る警察官や村人の姿を描いた活劇映画「プロバガンダ映画」である。日本人と朝鮮人の村人の姿など、日本と植民地朝鮮の一体化を目指す「内鮮一体」が描かれている。しかし日本人と朝鮮人の協調を描く一方、「民族ヒエラルヒー、民族の序列がはっきりと描かれている」と水野氏は語る。話す言語や服装によって、日本人、朝鮮人、中国人という序列が表現されているという。女性の場合、駐在所首席の日本人妻・高津由子が頂点に立ち、産婆や看護婦の役を担う重要な存在である一方、朝鮮人の娘・金英淑や中国人の娘は下位になっている。作中、金英淑が女医になって村に帰り、日本人の由子より上の

立場になる可能性が生じるものの、最終的に両者の立場は逆転せず、植民地秩序が再構築される。「匪賊」の襲撃を受ける場面でも、銃を手に男と共に戦う由子に対し、英淑は怪我人を看護する従軍看護婦のような立場に留まっている。「内鮮一体」を進めるための「啓蒙」や教育の結果、朝鮮人が日本人と対等になる、あるいは上回る可能性が出てきた。しかし、支配者である日本がそれを許さなかったために、日本の植民地政策には様々な矛盾が生じていたと水野氏は言う。現実の朝鮮社会におけるこれらの問題がこの映画にも現れている。水野氏は「映画にはいくつもの見方があり、様々な問題を読み取ることができると。そうした問題をこれからも考えていきたい」と結んだ。(雪)

所長	事務長	総務掛長	掛員

H28.4/1 配布。



宮川様:HPへの掲載をお願いします。
左記へ確認印をお願いします。

